

# こころのやりの老

## 應現の巻

### 目次

前篇	.....	一
教祖人格の実質	.....	一九
わがみ佛の慈悲のおも	.....	二二
後篇	.....	三二
三昧	.....	三一
念佛三昧向位	.....	三一

### 教祖靈的人格の實質

#### 一 緒言

願して曰く譬へば西に日は入るも、光は月に映る如と

無量壽王の日光は、牟尼滿月に輝やけり

無量壽如來の光明は永しへに照せども、我ら無明長夜に眠るものに在りては見ること能はず。されど、東の天に皎々と照らして、永夜に彷徨よふ吾等衆生に、永遠の光明を與へ給ふは滿月なり。其滿月に譬へらるる教主は、釋迦牟尼佛として世に出で給へり。

我ら衆生は無明の長夜に眠りて、直接に彌陀の日光を見ること能はざれども、しかも其光は此世に現はれ給ふ。釋尊は淨滿月の如くに照らして、我らに教化の光を與へ

給ふ。滿月の光は即ち西に在る日の反映なり。教祖釋尊の圓滿なる靈格の光を見れば淨界に在ます彌陀常照の光明を想像するを得べし大經の序分に「爾時世尊、諸根悅豫形色清淨、光顏巍巍」と靈的人格を表現し給ひしは、彌陀の光明を受くれば誰しも斯様に成り得らるるを以て、此より説き示す彌陀の眞理を聞きて如説に修行し、汝等衆生も永遠の光に依て復活せよと、教祖が人格を以て其範を示し給ふなり。

此大意は、本來衆生は皆な佛性即ち佛に成り得らるる性を有せり。然れども無明の爲に黒月の如く、少分も光を現すこと能はず。月は本と光なれども、日光を受くれば照輝く如くに、衆生の月は彌陀の日光を受くれば、受し丈に光を現はすなり。月が新月より次第に進みて滿月と爲る、末だ信仰に入らざる凡夫は黒月なれども、仄かに靈光に觸るれば初教心の菩薩となり、新月より滿月に至る迄の行程を、菩薩五十二の階級とし、全く淨滿月と顯はるれば、即ち諸佛の正覺と爲るなり。

いま教祖世尊は、光顏巍巍と滿月の姿を示し給ふ。觀音勢至文殊普賢等は、十四夜の月にて、諸宗の祖師や宗教界の偉人等より、初心の輩に至る迄、各階級に亘りて光明生活に入りし人は、分々に光を受けし月と云ふべし。

更に譬を以て之を明さば、彌陀は心靈界の太陽に在ます。若し太陽なかりせば、地上の生物は生存する能はざる如く、彌陀の光明に依らざれば、衆生の靈性は活存すること能はざるべし。

又太陽には光熱化の三能ある如く、如來に智慧と慈悲と威神との三能力ありて、衆生の心靈に被らしむ。此光に觸るれば人の靈性を開く。其光に充されし精神が即ち靈格なり。太陽の光が金剛石に反射する如く、人の精神に輝く力は彌陀の靈格なり。人の心靈に此光明が現るゝ時は、知力には知見の悟と爲り、感情には歡喜妙樂と感ぜられ、意志には最高の道徳と爲り、一切の萬徳は悉く此靈より發現す。

要する處、宗教は此靈光を獲得し、靈的人格を作り、最善の努力を以て、自己の天分を全ふするにあり。靈光は永遠不滅なれば、現在を通じて盡未來際に亘れり、此靈

光が完全に顯はれし處を、即ち淨佛國土と云ふ。

教祖世尊は斯靈光を衆生に教へ、一切を化せんが爲に此世に出で給へり。一代五十年に亘れる教化中、最も出世の本懷を顯はし給ひしは此經なりとす。故に自己の靈的人格を標榜として、衆生を此光明の下に誘導す。實に釋迦出世の本懷はこゝに存するなり。依て斯經の序分、教祖の人格現に就て説明を試みんとす。

## 二 實 質

(イ)靈格の表相。大乘佛敎の釋尊は大哲人たると共に大宗敎家なりしなり。華嚴及び法華經等の教主としての釋尊は、實際哲學の方面より眞理を悟る道を示され、無量壽經は宗教の教主として宗教の模範を垂れ給へり。例へば地上のあらゆる生物は太陽の光と熱とを被むらざれば生活し得ざる如く、一切衆生は本來佛性を具すれ共、心靈界の太陽たる無量壽如來の光明を被むらざれば、靈き生命と成り靈き人と成ることを得ざる所以を、教祖自身が無量光如來の光明に充されし御相を表はし、然して誰人も斯光明を獲れば如斯き靈き人格と爲るを得べしとの範を示し給ふ。即ち經に

爾時世尊、諸根悦豫し恣色清淨にして光顔巍巍たり、尊者阿難、佛の聖旨を承て即ち座より起ちて、偏袒右肩し、長跪合掌して佛に白して言さく今日世尊諸根悦豫し恣色清淨にして、光顔巍巍たること明淨なる鏡の影表裏に暢るが如し、威容顯曜にして超絶し給へること無量なり。未だ曾て殊妙なること、今の如くなるを瞻上らざりき。

斯文は教祖の内に充ち給へる靈が、容貌に表現したることを述べたり。釋尊の御眼や御口等のすべてに渡りて、悦びに充ち給へる即ち姿色の清淨なること、光顔の威嚴めしきことの表情は、靈に充されし相となり、内に悦あれば容貌外に現はると云ふべし。

此に先だちて釋尊が彌陀三昧に入り給ふ。然る時に彌陀の日光は釋尊の淨滿月に反

五

四

映して、即ち斯表相となりて現はれしなり。是れ釋尊の内心に感じたる所自然と表に輝き出でしなり。釋尊の感情が彌陀の靈に充たされ、歡喜妙樂が全體の悦豫と現はれ感覺の靈感清徹せる所姿色の清淨と現はれ、智慧と意志との神聖にして優すべからざる威嚴が、光顔の巍巍と現はれしなり。實に言葉に盡きせぬ釋尊の御姿の内容は、矢張り淨界に在ます彌陀の靈光なりと云ふべし。恰も滿月の光りは太陽より受けしその如し。故に阿難が聖意を承て申上げし語に「世尊の諸根の悦豫光顔の巍巍たることは、明淨の鏡の影が表裏に暢る」と、釋尊の心の鏡に彌陀の靈が映現したるなり。是れ教祖がすべての信ある人に範を示し給ひしものと思へば、教祖の内容はいかゞ感ずらん。我等はいかに心の内容實質を養成せんとするか。

(ロ)靈格の内容。前には教祖の表に現はれし相は、内彌陀の靈に充たさるゝ故なることを明せり。斯の如きの表現には、必ず内容の靈的實質なかるべからず。是を經に教祖の内容を五分類として、心相を示し給ふ。阿難の言く  
唯然り大聖我が心に念言すらく、今日世尊奇特の法に住し、今日世雄諸佛の所住に住し、今日世眼導師の行に住し、今日世英最勝の道に住し、今日天尊如來の徳を行じ給へり。去來現の佛、佛と佛と相念じ給ふ、今の佛も諸佛を念じ給ふこと無きことを得んや。何が故ぞ威神の光々たること乃ち爾るや。

淨界の彌陀の日光が、之を人佛釋尊の滿月に映現したる五つの靈徳とすればいかに配すべき

(一)今日世尊奇特の法に住す。彌陀の清淨光が釋尊の感覺に映じたるものとす。奇特の法とは、彌陀如來の清淨光が、釋尊の六根清徹なる金剛石に映じて、眼耳鼻舌身の六根が、肉天法慧佛の清淨となりて、即ち二十五根清淨となり、二十五清淨なる時は十方三世一切の國土身心として清淨ならざるなし。故に奇特希有不可思議なり。  
(二)世雄諸佛の所住に住す。釋尊が彌陀の歡喜光裡に安住する相なり。凡夫の感情は弱し、喜怒哀樂の八風に搖がされて、自分自身自己を制すること能はず、隨分豪傑と

七

六

云る、大將も、一朝の怒に朝敵となる。三軍を叱咤する將帥も、峨眉の愛には溺る。況んや平凡の凡夫に於てをや。感情としての大雄者釋尊の如き未だ曾て有じ。王位も富貴も釋尊の心を奪ふこと能はず。魔女の魅妖を以ても毫も世尊の情を搖がすを得ず。之れ彌陀大我の中に安住する故に、心靈は歡天喜地一切の妙樂に充滿すればなり。世に吹き荒む八風も之を如何ともすること能はず。

(三) 世眼導師の行に住す。是れ彌陀の智慧光が釋迦の智力に現はれて、世の一切の眼と爲て如實の道に導びく。世界一切の人類は心靈の盲目にして、人生歸趣の如何を見ず。俗諦因果の理を辨へずして、惡を作して惡道に、善を作して善所に趣くことを知らず。況んや永遠の光明なる涅槃の常樂に歸する道に於てをや。若し世眼世に出まさらば、一切の人類は闇より闇に入りて、一人も道を得る者あらざりしならん。釋尊は彌陀の智慧光を以て、一切の衆生を光明界裡に導き給ふを以て導師の行と云ふ。宗祖は我日本人民を淨界に導く眼なり。若し宗祖出でまさずば、諸の群生は、只現在の欲に盲して、己が永遠を知らず、悉く三惡の闇に入るべきを、宗祖が淨土の門を開きて、永遠の光明に導き給へばこそ、智慧第一の譽れあれ。所以ある哉。

(四) 世英最勝の道に住す。彌陀の不斷光は人佛の意志に受けて最勝無上の道徳心と爲る。意志の最も鞏固なる、世の最勝の道徳を世英と云ふ。道徳の動機に四階ありと云グントの説は、道徳も不正を行へば世の信用を失ふ、之を怖れて惡事をせざるは低き道徳にて、次に他に教へられし儘に作さざるは其上にて、自己の良心より出づ善の行爲を爲すは其上にて、最高等の理想、即神の聖意より自己の意志に出るものは最上の道徳心なりと云ふ。例せば人天的の道徳と、二乘の眞空の道徳、乃至佛陀の道徳とを比較せば、佛陀の無上道心より出づる道徳心は、絶對無上の道徳なり。故に最勝道なりと云ふべし。

(五) 天尊如來の徳を行す。本佛彌陀萬徳圓滿の光は、人佛釋尊の身に現はれて本佛如來の徳を行じ給ふ。即ち釋尊は十八不共の徳を以て、身の行爲口の言語、意の思想、

この三輪完全にして一の缺點なきは實に満月の如く、然して佛陀が衆生に教へ給ふ本懷は、一切をして彌陀の光明に攝せられ、靈き人と爲りて如來の聖意を我意とし、最善の努力を盡すを以て、人生の一大事なりと教へ、尙自ら模範を示し給へり。

(二) 釋尊が彌陀如來を念すること、釋尊の奇特法より最勝道に至るまでの五靈徳は、本佛彌陀の靈現なりとは銘文あり。我れ曰く經説なり。即ち次の文に「阿難の言さく今佛如來もまた他の如來を念じ給ふや、或は不思議にも、平素と異なる威神光々として現はれ給ひしにや、と釋尊に問上るに、釋尊は阿難を稱めて「汝は能くも我が心を知り得たり、實に然りと、是れ今佛釋迦が、本佛の彌陀を三昧定中に念じ給ふなり恰も日光が満月に映現せしが如し十方三世一切諸佛、悉く無量光の名を稱へて香嗟せざるはなし。十方諸佛悉く聖名を稱へて彌陀を念す。今佛釋尊焉そ名を稱へ念せざらんや。彌陀を念するが故に、彌陀も念じて人佛に顯現す。故に釋迦は人界の彌陀にて、彌陀は淨界の釋迦に在ます。仰いで信すべし。

### 三化用

(イ) 釋迦出世の本懷。大乘の佛典の中、法華華嚴等の經は、釋尊が大哲人として、自己冥想中の經驗を説いて、諸の大菩薩等をして、三昧理想の境に遊ばしめんが爲めなり。然れども宗教の意義を以ては、華嚴に普賢行願の所有功徳を回らして、阿彌陀佛を見て、安樂刹に往生せんことを願はしむ。

無量壽經は釋尊が全く大宗教家の眞面目を現はし、自身は人佛にして無量壽如來の威神光明最尊第一にして、諸佛の光明の及ぶこと能はざる所、乃至彌陀は大慈悲の父なりと教へて、一切理賢乃至一切衆生を、悉く此の佛に歸せしめ給ひしは、恰も猶太のキリストが天に在ます父に祈らしめしが如くなりき。今經には宗教家としての釋迦本佛彌陀の大慈悲を以て我意とし、三界の衆生を矜哀して此世に出まし、光く道教を聞きて群萌を拯はんと欲し、歸する處は彌陀の眞實の利を以て、一切衆生を大慈悲の

光明に攝取し、無限の光と無限の壽とに、歸入せしめんとする聖意に外ならず。一切衆生は佛性の卵なり。如來大慈の懷に攝められて解化するにあらざれば、佛性顯現し難し。大慈の光明を以て一切を開化す、此れ釋迦出世の本懷なり。

(ロ) 出世本懷の二。靈の人格此世に出で給ひし本意は、一切衆生の佛性を開き、煩惱を靈化して聖き人と爲さんが爲にて、法華は諸佛如來の一大事因縁を以ての故に世に出現す。一大事因縁とは衆生の佛見を開示して、佛の正道に悟入せしむるにあり。彼は佛性を開く(哲人的に智慧を以て悟入せしめ)今經は宗教的に大慈愛を以て靈き子を育みて佛と爲さしむ。通じて大乘佛敎の教化の目的は、大慈父が衆生を以て靈き子を父の如き全き成佛をなさしむるにあり。一切衆生悉有佛性、衆生悉く靈性を具有し乍ら、煩惱の殼中に伏在す、恰も鶏の卵の如し。之を煖めて解化するに非ざれば佛心顯れず。靈性開顯せざる間は煩惱我が主人となりて我儘を働く。佛性を開發するは例へば教育にて知能を啓發する如く、佛性を煖めて開發するは彌陀の慈愛の懷に攝取せらるゝにあり。唯念佛のみ有りて佛子の卵は解化せらる。靈性が顯はれる時に煩惱は其質を變じ、從來惡用し來りし貪瞋も今は善質に靈化し、強欲の心も變じて衆生を助けたいと云ふ善き欲望と爲り、自己の惡を呵責する奮怒となり、煩惱の滯も變化する時は甘き干柿の實と爲る。

(ハ) 靈格の活動。釋尊が一生涯を通じて、八相成佛の化用、即ち御一代の働きは、唯一切の人類の靈性を開き、惡を善化し靈き人として如實の生活に入らしむるにありしなり。經に「今我此世に於て作佛して教を施し道を宣布し諸の疑を解き、迷の本を抜き衆惡の源を杜ぎ、人生の歸趣を明にして未度の者を度し、生死に迷ふものをし永遠の光明に入るの道を決定せしむ」と。已に東天に旭宇が昇りて世が明く爲れば衆生は安心して自己の業を勵むべし。佛陀の日に世に出で、すべての心靈を安んせしむ。釋尊は終り涅槃の夜半に至る迄、生涯に亘りて飽くまで奮闘して休み給ふこと無かりき。我朝の釋迦即ち宗祖御一生の間、淨道の爲に盡瘁なされしことに彷彿たり

(ニ) 靈的生活。初に靈の養分。例へば肉體の生活には必ず肉體を組織する營養分を要する如く、靈的生活にも糧を要すべし。曰く肉體を健全にして働くには隨つて營養に富める食物を攝取するが如く、靈の生活には殊に養分の糧の缺くべからざるものあり經に、

佛陀は智慧無礙にして能く過絶すること無し、一食の力を以て能く壽命を住めしむること億百千劫無數無量にして、復た此に過ぎたり。諸根悅豫して以て毀損せず、姿色不變にして光顔異ること無し。所以は何ん。如來は定慧究暢して極りなし、一切の法に於て自在を得たり。

靈の養分とは一食の力にて靈の生命を保存す。其養分とは甘露不死の靈食にて、アミトは是れ諸佛の食物にて諸佛はアミトに依て無量の壽を保つ。キリストが「人はパンのみにて生きる物に非ず、聖書は心靈の糧なり」と。彼已に爾り、況んや大乘の佛敎に於て、何ぞ靈を養ふの糧を與へざらん。五戒を完全に守りて人格の核を爲さば人間の生命を保つ。真空無爲の靈核を爲さば聲聞の生命を保つ。大菩提心的の靈核を生命とすれば眞の佛子となるなり。釋尊は彌陀の大靈と連絡せる靈を常恒に享受しつゝあり。妙味念々に養はれ、肉の生命が糧と氣とに養はるゝ如くに、アミトを靈の糧とす。其味微妙不可思議なり。獨り釋尊が自味自知し給ふのみ、我等とても佛陀の賜なる念佛三昧により、念々の中に法喜禮悅の妙感窮りなきを感する事を得べし

次に靈の生活。釋尊はアミトの糧を以て、法身慧命を養ひ給ふが故に、諸根即ち眼耳鼻等を始め、身體中の各部は悦豫に充たさる。是れ彌陀の靈が釋尊の生命を成すればなり。姿色不變光顔無異の内容が、表に現るれば金色なり。全體黄金は自分より鏡を生せず。釋尊は彌陀を我中心精髓として内容の實質に充たさるゝ故に、外界より來る云何なる迫害にも驚動せず。又稱讚にも搖がされず。然るに概して人は外部より來る毀譽褒貶の風に、内心が煽がれて、或は喜び、或は怒り、或は怖れ或は悲しむ。其内心の動搖は、忽ちに感情と爲り血眼となり、又は青ざめ杯して種々に姿色を變態す

是は内的實質に於て、金剛の如き靈を中心とせざればなり。我朝の釋尊たる宗祖は、山門大衆の迫害に遇ふも、無期徒刑の宣告に臨みて、從容自若泰然として山の如く動かされ給はざりしは、彌陀の聖意を以て我意とし給ひしに依る。言ひ換ふれば靈を以て實質と成し給ひしなり。

釋尊が舍衛國祇園寺に在して教化し給ふ折、六師外道等が釋尊の化導を妨げ、諸の信者の歸依心を毀たんとして如旃荼彌に謀る。彼女容姿端正人を魅すに甚だ巧みなり世尊説法の會に入り、百千の大衆を別けて御許に到り、即ち言はく、我智よ、我姪娘して臨月近づけり、何ぞ自分の家庭を省みざる、自から修まらずして焉ぞ衆を欺むと云ふ。此體を見たる大衆は奇異の念に耐ざりしならん。時に世尊は從容として、姿色不變光顏彌麗しく、彼を叱咤せず、又敢て辯護もし給はず。時に天の帝釋正法護持の心を以て鼠と爲り來りて彼女の腹中に入り、鉢盂を撃ける緒を噛み切りけるに、鉢盂忽ち地に落ちぬ。大衆一同奮激して外道等が奸策を大に罵しれど、世尊の光顏は異ること無きに、外道等自ら慚愧に耐へずして其座を退けり。靈的人格の實質は黄金の自己より鑄を生ずること無きが如く、如何なる境遇にも其色を換へざるなり。

又或時提婆調達が、阿闍世太子を唆して世尊を謀殺せんとし、矯り請じて城門に入らしめ、常に火坑に陥し入れんとす。其時に世尊從容として笑を含み、口より光を放つ時に阿闍世太子、其慈顔を瞻て改心慚愧して、世尊に歸依せりと。斯くの如く、いかなる境遇にも姿色光顏異なることなきは、内靈に充ち給へばなり、要するに此經の本意は、教祖自ら範を示して、斯教を信する者をして、彌陀の光明に靈化せられて、靈き人格を形成する處にあり。

(ホ)靈の修養法。已に彌陀の靈を糧として、靈的人格の生命を保存し、靈き生活を爲さしむることははゞ演べたり。然らば其靈の糧を如何にして攝取すべきやと云に付て、經に曰く「如來は定慧極りなし、一切の法に於て自在を得たり」之れ禪定と智慧との三昧を以て、彌陀の靈が我と合して萬徳を我有とす。禪定にて一心靜まる處に彌

陀と合し、其合したる所に如來の萬徳を我有として、靈の實質を顯はすは智慧の作用なり。此の定慧を合したる作用が即ち三昧なり。世尊は定を以て彌陀と合一し、智慧を以て、彌陀の萬徳を我有として、自ら其徳に満ちて一切を教化し給ふ。靈を養ふに例へば、小兒に母乳を哺しめば、乳の中に一切の營養悉く包含するが如く、念佛三昧に依て靈を養へば、養分悉く包含して缺ることなし。随つて自己の靈性が益々發達すれば、三昧中に種々無量の一切の妙味を味ふことを得べし。

願くば賢明なる聖き同胞よ、斯經の宗趣は念佛三昧を以て宗とす。大慈父の靈に養はれて自己の靈に活き、佛祖の靈格を我として、我神に靈き人格を作り、現在を通じて永遠の生命と爲り、彌陀の聖意を以て我意とし、一切の同胞と共に永恒の安寧を得んことを期せん。

(わがみ佛の慈悲のおも)

(先に中華佛敎の曙光との題にて)

佛敎が時來りて東の半世界の精神界を照さんが爲に其靈瑞とし其曙として後漢の孝明皇帝の靈夢の中に丈六の尊容眞金色にして圓光徹照して威徳尊嚴なるを啓示せられし。是正しく東西半世界の有らゆる人の心の本尊として觀想し奉つるべき靈相なり。

如來は本法身大智慧の心相にして十方法界一切の處に充滿せざるなし。機縁熟する時は應現の靈感を被むらざるなし。一たび此の靈相を感ずれば、そが其人の精神の本尊と爲りて、常に其人の心靈をいかに靈的の活躍の力を與ふならむ。

彼のプラトーンが理想の愛をのべて「美は天上の容姿に伴ひて輝きつゝあるもの、彼若し地上の現前に現はれ來ると雖も其最純潔なる感覺の際より其の清き光を發する者若し人世に生れて素樸にして且つ前世に於て常に光榮を觀得したりし人は、其神

貌を見て神聖端嚴なる相好に驚愕せざるはなし。先づ一瞥の下に悚然として身戦き、亦宿世畏敬の餘情は自ら油然として湧き來り、恰も神像に對する如く、身を投じて之が犠牲たるを辭せざるべし」とは彼の靈的哲人の靈的最も眞面目に求道の志深く靈的の神を愛慕の心情に富めるものにあらずや。

おのづからかく靈感を被むる程の孝明帝なれば帝の心には其感じたる靈相が終身帝の心靈の本尊として威容赫耀として實在せしこと明なり。

宗教心はかくの如きの靈相を以て其の人の心意を照鑑し給ふ本尊として、そが指導の下に、日常の行爲を執る如きは最も、

自ら謂ふに、十二歳の時に家の後の杉の木に繁れる向に西の天霽れわたる空中に想像にはあれども三尊の尊容儼臨し給ふを想見して、何となく其尊容に憧憬して止まざりき。自ら謂へらく願くは我今此想像に尊容を靈的實現として瞻見奉らんと欲して止まず。其のち廿四のときに東京駒籠の吉祥寺學林に於て止山上人の五教章の講義を聞く頃謂へらく田端の東覺寺に寄宿し日々の往復にも、専ら口に稱名を唱へ、意に専ら彌陀の尊容を想ひ、神を凝らしけるに、一日蕩然として噴廊、其時に彌陀の靈相を感じて慈悲の眼丹果の唇、其温容を想ふとき身心融液して不可思議なるを感ず。爾してより已來見んと欲せば即ち現ず。其靈(感)極なきに(し)、朝日輝く中に尊容の笑める大慈悲の尊容を想ふとき靈感極なきを感ず。

吾みほとけの慈悲の面  
朝日のかたに想ひて  
照るみすがたを想へば

靈感極りなかりけり  
心の宮殿に本尊が尊く辱く感想する時は、是が宗教心の中心眞髓と爲るので、有らゆる心靈の力は是より發現するのである。  
一には自己は實に意志の弱きもの、動もすれば誘惑にもまた自己の慾の爲にも惑ひ

易く、至善の方に向つて進むことのできぬものである。けれども自己の心眞正面に神聖なる慈悲なる如來の實在を念ふ時は、自ら神聖なる聖意に隨つて光明の大道に進まんとする意志が惹起せらるゝに至る。二には感情に於て種々の事情の爲に煩悶し懊惱する場合にも、眞正面に慈悲の温容を思ひ浮ぶ時は、自づと身も心も融液し快然と悦びになる。三には現在より未來永劫の靈界に誘引せらる。

二二

味

身心の統一と目的

精神は身體の内性にて身體は精神の表現である。此身體は統一的にして歸する所の目的あり。身體に就いても身には種々の生活機體の團體である神經作用消化作用循環排泄作用等の機能をも以て組成せる此作用は系統的に統一的に目的ある如くにて、只に此の器械的に働くのみにあらずして法身か此自活す所の理目的ある如く観らる。此種々の機體構造が無意識に進合するにあらずして、機關に系統的統一あり。骨節筋肉等の聯絡は悉く生理的統一關係に非ざるなし。各部の機能にも各々目的あり例へば目を構成する眼膜其他の諸成分の統一聯絡も歸する所は物を見るを以て目的となす。五根及一切の神經乃至一切の生理機能の各團體なる統一的の身體は一切の生活機能を構成の合一目的は個體の生活を目的とす。此身心合一の目的も人としての生活を目的とす各々々の生命もまた大なる目的によりて統一せらる。身體の各々々の機體は各自の作用は別なるも相互に影響を及ぼす如くに一切の個々にて構成する人類相互の間もまた相互に影響交渉す。有機的生理機能は生命持續を目的として活動するも此活動は意識的を要すれども無意識的に衝動する消化循環等も自動的に巡環し吸収し意志は能動的に自覺的に目的觀念に向つて選擇批判欲求し目的を實現するに至る。  
人の生活には消化巡環呼吸作用の如く無意識的自動的に生命保存の作用を營んでゐる。  
また高等なる意識作用にては精神の作用を統一して目的を實現せんとする作用あり。

精神意志は其要求する如來を見ず、他の種々雑多の念が雜起す。それを排除して其目的に向つて進行す。目的の實現を欲して精神努力す。

目的に集注する時は觀念聯合に（緊張状態に、他念が發現するも其勢力を壓し）の目的に適合せんとする種々の雜念にからるゝが故に意志は障礙せらる。之を一所に制し注集選擇精進の力を發揮して其目的を實現せんと欲す。

雑多の念より選れたる目的觀念を實現する意志の勢力、益努力する意志、如來の靈應を實現せんと目的に精神は統一ある活動をす。

此如來と云ふ一定の對象に凝神する注集する心的内容は漸次に明らかに現るゝは注意なり。此注意を妨ぐるは妄念、この妄念を制止して心一向に努力す。心々相續して念々念すること一心金剛の如く此目的を實現せんと欲するに其結果として豫想が實現するに於ては満足し快感を感ず。若し反對に目的を遂行する能はず豫想を實現せざるに於ては不快の感なき能はず。

三昧感應

目的たる三昧即ち見佛の目的を實現せんとするの精神力、この要求は宗教心は主體と客體の關係にて只自己の精神のみが客體の靈應に充たさるゝ處に於て満足す。然りいまだ宗教に入らざる人にはそのまゝにて不満なきも一度宗教心の如來の靈應に満さるゝ時は缺陷を自覺する時は敢て靈に満されんと欲す。若し闇夜に電燈の一度つく時は燈光の要を感ずる如く、人の靈性は、大靈の力に満さるゝ時は不満なるを感ず。故に要求努力は宗教的意識の完成を期す。

現在我は闇である。靈の光を要求す。また現在我の生命は有限である。永恒に生きんとする要求が起る。靈的光明で永恒の生命をば宗教的關係の目的なり。主體なる我

を如來の大靈との主客融合。

大なる如來の心靈と融合し、此大心靈の流は過去際よりまた未來際まで永恒に不變。大生命の源より我靈は生活。

同一大光明大生命の中の一切の個々なれば一切の衆生は同一の本に依りて永劫を盡して流れ來り常恒に互に感應し交渉す。

此一大目的は一切の心靈を攝して常に活氣を與へ相互に交渉感應して大光明と大生命を個々の身に依りて實現す。

三昧修練

人の精神活動は内心に喘ぎ外界に奔蕩して須臾も休止することなし。種々雑多の念慮に忙殺せられて如來と合一せんとする三昧目的觀念に向つて努力、他の勢力を排して一定目的に如來を獲得合一せんとするには、初心には甚だ困難なり。此百難を排して一定の目的に注意凝神し金剛心に克己沈着眞面目なる勇氣を以て精神鍛錬を要す。

感應

人は既に經驗したる過去の事實を接續的に再現する性あり。富士の山と云へば靈を觀念し、また阿彌陀佛に光明を聯想し極樂を觀念する如く、是觀念聯續の復現なり。また純然たる觀念に開發せられて聯合作用を作すことあり。例へば三昧冥想して佛の相好淨土の莊嚴等を想像する時は明瞭にして外界の事物を目標するよりも尙分明なるを得。

主我と客我聯合

主我は經驗の自己、客我は經驗せらるゝ對象としての經驗、主我は意識の自己にしてそれ自身の自體を認識せす。

主我は刹那々に生滅變化するも過去現在を一貫して唯一不二の實體常恒に存在するを主我とす。

主我の存在を自覺する故に對象なる客體も亦主我存在を認定す。

一方は主我に、対象を對我とし観念集注する時聯合作用現るゝを見る。  
観念集注の内容如何。

吾人が生理的に食物を攝取するに營養分を身體に入れて生理機能によりて自己身體に同化する。對症感應も同理なり。既有の經驗に聯絡により是對者の疾患に對する自己保存の缺陷を感知する観念に向つて兩我の觀念聯絡を喚起す。對者を自己に類化應同す。此聯合作用は對者と全く反對なる時は觀念集注するも兩者の聯合の成立するなし。反抗の態度は感應の妨なり。

### 三 味 統 一

雜念、人の意識は種々の雜念亂起して同一觀念を把住することは容易にあらず。意馬心猿外塵に動せられ内心に喘ぎ劇波停め難し。種々雜多なる社會の刺激に襲はれたる習慣甚だ除き難く紛々たる雜念雜起し想像記憶等の益繁雜に往來す。

宗教の精神修行の要は雜念雜亂を驅除して純一無雜の思念を精練するにあり。明鏡止水無想無念の境に安住するにあり。一心專念自己の妄念滅却する處に如來に顯現す

### 意 志

三味の修行には意志の精練を要す。精神の力は意志にあり。意志の力強ければ感情及びすべての念慮を制す。妄念を轉じて目的に向ひまたは滅止しまた抑制する等は目的に向つて專心に強制するも感情は活動劇しく或は烈しく熾かと思へば忽ちに消え、(若感情に隨はゞ)一定の撰擇せる目的に向つて進み他の雜念を排却するは意志の力なり。念佛三味は雜多の念慮を排して専ら如來に歸命し、純正目的は如來の中に入り、如來の光明獲得する處にあり。

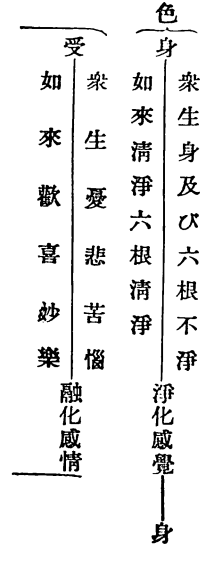
三味には自己を虚無にするにあり。雜亂なる意識を滅却して純一なる即ち如來の靈に充滿せしめん爲め意識を滅却すと云ふは、それは從來の妄なる我を滅却するは如來の靈光に滿され靈に活きん爲。若し如來の靈に滿さるゝ時は靈的活氣全身に瀰漫す。

### 住 神 一 境

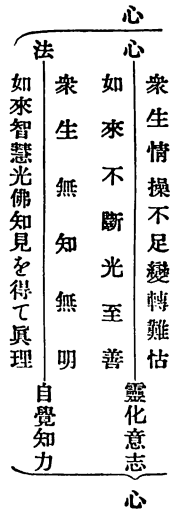
念佛三味は但觀念に非して専ら所念の如來を純一專注し、心念統一し所念の彌陀を專念し目的を遂行せんとの專心念なり。漸々に純熟するに隨つて、精練されたる觀念は白日青天一點の片雲なく靈月應天靈妙の活動自己精神生命は全く如來の中、益邃玄に、如來我にあり我如來に在り。古人が月や我我や月やとわかぬまで心に澄める秋の夜の月とは此三味の心理の消息を洩せしなり。(註——以上一九頁より必要ありて再出)

### 念 佛 三 味 向 位

道諦、七科三十七道品。  
四諦、通じて佛教信條。  
道諦七科、宗教過程の條件。生物生活共通の形式に例す。  
心靈生活、大小聖淨にわたつて同一形式。  
初佛種子、宗教心の内四大要素の四念處。







光明の要と能

染汚 苦惱 無明 罪惡……宗教要  
 清淨 淨化 歡喜 智慧 不斷……宗教能

宗教要

能

清淨……厭穢 欣淨……身及感覺 濟美  
 歡喜……拔苦 與樂……感情 人生幸福  
 智慧……轉迷 開悟……知力 人生自覺  
 不斷……廢惡 進善……意志 人格完成

現在を通じて永遠にまで

四正勤

- 一 未生惡令不生 善 彌陀一切善及徳の總相 念佛して 如來の光明至善清淨真理正善美妙乃至一切善を表す。一切善此より生ず。故生長せしむ。
- 二 已生惡令滅
- 三 未生善令生 惡 自我、一切染汚、無知苦毒、罪惡、一切罪惡は是より生ず。故に防止す。
- 四 已生善令長

四如意足

至心……形式

信(知力)	自己の染汚等を信認す	信
	如來實在と實力を信す	信
樂(感情)	自己の染汚等を憎惡す	信
	如來の慈悲智慧圓滿を愛樂す	信

欲(意志) 自己の非惡を解脱せんと願作佛心  
 如來の圓滿に人格に生れんと願度生心

五根及五力

一、信

根、如來に對する信樂欲を以て安心の根を生せしむ。  
力、正助二業を以て益信力を發達す。

二、精進

根、三心、精進の根、如來を信樂、精密に進趣せんとの安心。  
力、正助二業を以て勇猛に精進して信念發達せんと力。

三、念

根、如來を愛慕戀念して捨てず。  
力、正助二業常に念じて捨てず益發達。

四、定

根、如來を念じて三昧的に如來と合一せんとの安心。  
力、正助二業念佛三昧を以て

五、慧

根、如來を信樂して仄かに曙光を  
力、

七覺友 開發位

- 一、擇法
  - 二、精進
  - 三、喜
  - 四、輕安
  - 五、定
  - 六、捨
  - 七、念
- 八正道 體現位  
三相

諸根（機能調節）

姿色（氣血調節）

光顔（腦髓神經統一機關發達）

五 德

一、奇特法（感覺）

二、安住處（感情）精神生活、教（）が衆生を安住せしむ。衣食住を與へ給ふ。

三、導師行（知力）自覺覺他、人生の歸趣を覺し、意義ある光明ある人生。

四、最勝道（意志）道德、人格圓滿完成せしむ。

五、如來德（三輪圓滿）三業を圓滿にせしむ。

昭和六年十月廿八日 印刷  
昭和六年十月卅一日 發行

誌代郵税共  
年二圓

編輯兼  
發行人

山崎 辨成

牛込區早稻田鶴卷町四〇三

印刷人 小林 七太郎

牛込區早稻田鶴卷町四〇三

印刷所 靜文社印刷所

東京市小石川區水道端二丁目四十四番地

ミオヤのひかり社

振替口座東京六八五一番